

桃花流水^上

陳舜臣



桃花流水

上

陳舜臣



朝日新聞社

桃花流水(上)

定価八八〇円

発行

昭和五十一年十月十五日

著者

陳舜臣

装画

横塚繁

装幀

熊谷博人

発行者

角田秀雄

印刷所

凸版印刷株式会社

発行所

朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

© Chin Shun Shin 1976

目

次

黄色い紙

天神前の細道

天外天

父の友

邯鄲の夢

波の彼方

南国風光

華燭前後

岐路

疑惑

わが町

巢立ち

希望

非幻庵

七

一六

二四

三三

四四

五五

六六

八三

九三

一〇一

一一四

一二九

一四三

一五五

長城の影

残 夢

竜王廟

心は飛ぶ

足踏み

黄 河

道は遙か

古 都

一六七

一七九

一九四

二二四

二三九

二四三

二六六

二七九

桃花流水
(上)

黄色い紙

みづと花吹雪であった。

根津家の庭の五本の桜が、いっせいに花びらを散らしはじめたのである。

程碧雲は、眉のうえにおちて、妙にからんでくる花びらを、右手の小指で払いおとした。彼女はいま外出から帰ってきたばかりであった。門をはいって、玄関へむかう途中、たちどまって、

「ああ、きれい。……」

と、呟いた。

花びらの群れは、心もち斜めに、ゆっくりと舞うように散っている。風は落花にあわせるように吹いていたのだ。ときどき小さく旋回する花びらもあった。

あと五、六歩あるけば、もう玄関だ、彼女はそこにしばらく立っていた。彼女が足をとめたのは、落花の舞いに氣をとられたのではなく、動悸がまだしずまらなかったからである。

坂の多い神戸のまちでも、この北野町界限の道はとくに勾配が急である。彼女は天神さんの坂を登ってきたばかりだが、呼吸がみだれたのはそのせいだけではない。

碧雲はもういちどハンドバッグのとめ金をはずして、そのなかに目をおとした。赤い財布のそばに、四つに折った黄色い紙のはしがのぞいている。

さきほど天神さんの鳥居の前で、鍵を取り出そうとしてハンドバッグをあけ、そこに黄色い紙片をみつけたのである。そのとたん、動悸がはげしくなった。

（神戸まで追いかけてくるなんて）

毛筆でかいた、かなり大きな字の三行の文章は、ひと目で読むことができた。いや、読むというよりは、ちらと見た、というべきであろう。最初のいくつかの字づらを見ただけで、いつものあれだとわかったのだ。もう暗記している文章なので、あらためて読むこともない。それにしても、やはり気にかかるので、バッグのなかをのぞいて、その黄色い紙片がはいっているのをたしかめたのである。

書いたほうでも、べつに読ませるためではなく、彼女にあることを忘れさせないのが、おもな目的であろう。「忘れてなんかないわ」

彼女はそうひとりごちて、そっととめ金をかけた。バ

チンという音を、彼女は自分の胸の底に呑みこんだおも

いだった。そのとき、

「あら、ミドリちゃん、おかえりなさい」

と、屈託のない声が頭上に降ってきた。

見上げると、二階の窓から根津佐紀子が顔をのぞかせ、手を振っているのだった。

程碧雲は、この家ではミドリという日本名で呼ばれている。

「ただいま」

碧雲も手を振って答えた。

「なにかいいもの買ってきたのね？」

「どうして？」

「だって、ハンドバッグのなかをのぞいて、ため息ついているんだもの。宝石？」

佐紀子は二階の窓から、ずっと碧雲を見ていたようである。

「お金がなくなったのよ、つかいすぎて。それでため息よ」

碧雲はそう答えて、肩にとまっている花びらを指ではじき、元氣よく玄関のドアのノブに手をかけた。

東京から引越して、まだ二週間しかたっていない。

この家のある根津宏二郎は、神戸に本社のある根津商会の副社長として、東京に十年近く住んでいた。そのまえは上海支店に長くいたのである。ことしのはじめ、彼の兄である社長の根津永一郎が死んだので、彼は社長に就任しなければならなくなった。それは東京から神戸へ移住することを意味した。

もともと根津家は神戸出身で、宏二郎も中学を卒業するまで、この北野町の洋館に住んでいたのである。兄の永一郎はずっとここに住んでいたが、二年前、おもに健康上の理由から、須磨の海岸近くに家を買ひ、そちらのほうで暮らしていた。だから、北野町の根津邸は久しく無住だったのである。

そこをすこし改造して、やっと二週間前に根津宏二郎の一家が引越してきた。一家といっても、三人の息子はそれぞれ勤めをもっているで、神戸に移ったのは、妻の道子、娘の佐紀子、そして十二歳のときから預かっている中国人の女性程碧雲に、彼自身をあわせて四人だけであった。

家のなかには、まだすっかり片づいたとはいえない。げんに廊下にも大きな行李が二つ、ならんだままであった。玄関からはいった碧雲は、そこをよけて、二階の自分の部屋に戻った。

「さて、スリちゃんのプレゼントは」

碧雲は部屋にはいると、ハンドバッグから例の黄色い紙片を取り出し、それを机のうえにひろげた。

黄色い紙片が、最初に彼女の学生鞆からみつかったのは、二年前のことであつた。日本に來たあと、二年間みっちり日本語を勉強してから高等女学校にはいった彼女は、二年前の十九歳のときでもまだ五年生だったのである。

それより前にいちど、近所の大学生がラブレターを鞆のなかにねじこんだことがある。そのときは、彼女もそれを自分の目で見ていた。だが、黄色い紙は、彼女の気づかぬうちに、鞆のなかにいれられたのである。

ひとの気づかぬうちに、鞆のなかのものを抜き取るのはスリである。その反対に投げ込む人間はなにであらうか？ やはりスリの一種にちがいない。だから、彼女は、その見えざる犯人を、『スリちゃん』と呼ぶことにした。

二回目はその半年後のことであつた。彼女はもう学生ではなかつた。和田南陽という日本画の先生のところへ、絵を習いに通っていたが、帰宅してみると、ハンドバッグに例の紙がはいっていたのである。

学生時代なら、鞆は教室に置いていたのだから、音楽室や裁縫室で授業をうけているあいだに、誰かがそつと

入れたのかもしれない。だが、和田南陽のところでは、碧雲はバッグをずっと自分のそばに置いていた。とすれば、彼女が道を歩いているときか、あるいは地下鉄に乗っているときで、いずれにしても、相手はかなりの早わざを使わねばならなかつたのだ。

二回目と三回目は、間隔が短かく、約一ヶ月ほどにすぎなかつた。そのあとは、ほぼ三ヶ月か四ヶ月に一度の割合であつた。忘れたところに投げ込まれる、といったかんじである。しかも、投げ込まれたことを、彼女はいちども気づかなかつた。

東京から神戸へ引越すとき、彼女は、
(これでもうスリちゃんとはさよならね)

と、すこし名残り惜しい気がしたものだった。だから、天神さんの鳥居の前で、あの黄色い紙をみつけたときは、不意をうたれて、不覚にも呼吸をみだしたのである。

その動悸もおさまり、こうして部屋におちついて、黄色い紙を机にひろげると、なにやらなつかしい気がしてきた。

見なれた文字であつた。角ばつた書き方で、筆跡をかくそうとした不自然さも、もうすっかりなじみになつていく。

碧雲よ、中国人であることを忘れるな。きみの父は愛国者であった。父の名をはずかしめてはならぬ。

一九三七年四月十二日

龍

たしかに、最初のときと一字もたがわぬ文章で、ちがうのは最後の日付だけであった。署名もいつも『龍』である。この字はあまりにもりっぴすぎるので、呼びかけに使うには躊躇される。やはりスリちゃんのほうが親しみがあつた。

「スリちゃん、たまにはちがつた文章を考えたらどう？いつも一字一句、おんなじ文句、ちがうのは日付だけなんて、あんまり芸がなさすぎやしない？」

碧雲は机のうえの黄色い紙片を、指先でコツコツとたたきながら、そう話しかけた。だが、やがて彼女の指は、びたりとまった。

毛筆で書いた部分は、二年前とまったくおなじだが、そのうしろに鉛筆で数行、書き足しているのがみえたのだ。あまり濃くないし、文字もきわめて小さい。

碧雲は紙片をつかんで、窓のそばまで行つた。そのおぼろげな顔が、よく見えたのである。――

竜に会いたいのか？ 竜はきみの父親の死のようを知

っている。もし会いたければ、明日の午後三時、元町一丁目『天外天』の帳場に、竜の子に会いたいと申し出よ。

明日の午後、碧雲は京都へ行こうと思つてゐた。和田南陽の師匠にあたる野口鏡湖に会うつもりだったのである。この高名な日本画家にとつて、碧雲は孫弟子になるわけだ。和田南陽の紹介状もあった。その鏡湖にも会いたいが、それよりもスリちゃんとおぼしい『竜』に会いたかつた。

九年前に父が死んだとき、彼女はまだ十二歳だったが、まわりの人から、

――お父さんはお国のために死んだ。

としかしらされていなかった。だが、彼女はそれが暗殺であつたことは察していた。周囲の空気でわかつたのである。それに父はすこし酒を飲んで、ふだんよりおしやべりになると、

――ババはいつか殺されるかもしれないよ。

と言つたものである。

――どうして殺されるの？

と、彼女が訊くと、父は笑ひながら、

――ババは悪いやつらをやつつけようとする。すると悪いやつらは、やつつけられるまゝに、ババをやつつけ

ようとするだろう。

と答えた。

やさしい父であった。碧雲の母は、父の死ぬ三年前に亡くなった。碧雲も彼女の父も、さびしかったのである。

——中学を出たら、アメリカか日本へ留学させてあげよう。そうになったら、パパはさびしいけれど、辛抱するよ。

父はよくそう言っていた。アメリカと日本とに、父は親しい友人をもっていたのである。けっきょく、彼女は中学にはいる前に、日本へ行くことになった。

彼女の父は、上海財閥といわれた程家の三男坊だったが、兄弟や両親と意見が合わず、家業——金融、貿易などの仕事にも、ほとんどタッチしなかった。しかし、程家の関連事業の株を大量にもっていたので、のこされた碧雲が経済的に困るようなことはなかったのである。

碧雲の母の実家は台湾にあった。父の死後、台湾から引き取りの話があったらしいが、程家ではそれに応じないで、碧雲を根津家に預けることにした。彼女の父は結婚のとき、両親や親戚たちの反対を、強引に押し切ったので、そのしこりがまだのこっていたらしい。

——お父さんが亡くなった事情については、いずれきみが大きくなったら話してあげるよ。

根津宏二郎はそんなことを言っていたが、碧雲はもう二十をすぎたのに、まだ父の死についての話をきいていない。こちらから催促もしかねた。

近ごろ彼女は、しきりに父のことを知りたいと思うようになった。彼女が胸にえがいている父のすがたは、この黄色い紙にある、

——愛国者

という言葉を核にして、ふくらませたものである。黄色い紙の『竜』が、くわしく話してくれるのであれば、絵の先生のほうはあとまわしにしてもよいのだ。

碧雲は机のところに戻った。椅子に腰をおろし、黄色い紙を机のうえにのせ、しばらくじっとそれをみつめた。紙のあたりだけに、別世界のおいが、ほのかにたちこめているかんじがする。

ドアにノックの音がした。彼女はすばやく黄色い紙を、引出しのなかにすべりこませ、

「はい、どうぞ」

と、できるだけ明るい声を出した。

ドアがすこしひらき、そこからのぞいたのは佐紀子の顔であった。

「はい、わよ」

佐紀子は左手に大型の封筒をもち、肩をうごかして、

「ら、ら、ら……」

と拍手をとりながらはいってきた。

「なにかいいことあったの？」

と、碧雲は訊いた。

「あったわ。……いや、これからあるのよ。……いや、これからありそうなのよ」

佐紀子は二度も言い直した。こうしたものの言い方に、彼女の性格がよくあらわれていた。ひとくちに言えば、衝動的にうごく傾向があった。まず反射的にとびついてから、そのあとで訂正したり、反省したり、後悔したりするのである。

——もう二十の半ばをすぎるというのに、ちとおち着いてもらわねば。……

父親の根津宏二郎は、淡い顔でそう言っているが、碧雲はそんな佐紀子の性格がきらいではなかった。

碧雲は子供のころ、消極的で、とくにはじめてのことには、なかなか踏み切れなかった。そんな自分にはない性格、正反対の氣質を、彼女は佐紀子から意識的に学ぼうとした。その甲斐があったのか、近ごろは、

——佐紀子さんによく似ていらっしやる。

と、他人に言われるようになった。たしかに、自分でもスタートが速くなったような気がする。

「姉さま、なにがありそうなの？　じれったいわ、勿体ぶらずに教えてちょうだい」

と、碧雲は言った。

「縁談よ。……ら、ら、ら……」

佐紀子はこんどは、スリッパをはいた足で拍手をとりはじめた。

「縁談なの？　あら、こんどは気に入ってるようね？」

碧雲は佐紀子がいともより浮き浮きしていることに気づいていた。

二十六になる佐紀子に、これまでなんども縁談があったのはいうまでもない。うまく行かなかったのは、たいして佐紀子のほうが気に入らなかったからである。それも写真を見ただけの段階で。——反射的にきらいだと思えば、もうそれ以上進まないのである。

「よさそうだわ」

と、佐紀子は言った。

「それはよかったわねえ」

「よかったなんて、ひとごとみたいなこと言わないでよ」

「ひとごとって？」

と、碧雲はきき返した。

「そうよ。縁談は二つきてるのよ。そのうちのひとつが、

ミドリちゃんのだから、ひとごとじゃないでしょ」

佐紀子はそう言って、白い封筒を机のうえに置いた。

さきほどまで、黄色い紙が置かれていた場所である。

「あたしの？ まさか……」

「まさかじゃないわ。この封筒のなかに、写真が二枚はいつてるの。……見てごらん」

佐紀子は机の隅に、浅く腰をのせた。

碧雲が、封をしていない封筒をさかさに振ると、台紙つきの写真が二枚、すべりおちた。

「二人ともハンサムでしょ」

と、佐紀子は言った。

「そうね。……」

碧雲は両手に一枚ずつもって、それを机のうえに立てるようにして眺めた。たしかに、二人ともいい男という部類にはいるだろう。彼女が左手に持ったほうの写真は、学生服を身につけ、はっきりした二重まぶたの目もとがすずしげである。油気のない髪が、額にすこし垂れていた。

「学生さん？」

と、碧雲は言った。

「この春に卒業したの。医学部だからもう二十四だけど、それでもあたしより年下でしょ。そっちのほうは、だか

らミドリちゃんにまわすことにしたの。……こっちがあたしの……」

佐紀子はそう言って、碧雲の右手の指から、写真を抜き取った。きっちり七三に髪を分けた、にがみ走った背広すがたの人物の写真である。

碧雲は左手にのこった写真に、じっと目をそそいだ。襟に医科をあらわすMのバッジがついているが、それがすこし歪んでいる。無造作な性格の青年らしい。写真から受けた印象は、けっして悪くない。

「こちらは大学の助教授よ。……歴史の先生なの。将来、有望な学者らしいわ。年は三十一だけど、もちろん初婚。……あたしにぴたりって気がするわ」

佐紀子は、写真を胸のところで抱くようなポーズをとって言った。

「ご馳走さま」

碧雲は笑った。半ば苦笑である。

姉妹同様になっている碧雲が相手だから、佐紀子もぬけぬけとそんなことが言えたのであろう。

「お父さまも気に入ってるのよ。あたしとお父さまの好みが一致するなんて、めったにないことだけど」

「お見合いはいつ？」

と、碧雲は訊いた。

「明日よ」

「あら、そんなに急なの？」

「そう。……お見合いなんて、そんな窮屈なことじゃなくて、お二人を、明日、うちへ招待するのよ。だから、ミドリちゃん、明日はちゃんと家においてちょうだいね」

「でも、明日だなんて……」

碧雲は、黄色い紙に書かれた午後三時の約束のことや、そのためにどうなるかわからなくなった京都市行きのことなどを、頭にうかべた。平穩な落花の季節に、明日の予定が、とつぜん紛糾してきたのである。

「そんなに緊張することないのよ。相手の親御さんがいでのになるわけでもなし。知り合いになるきっかけをつくるだけなの。……塩見先生も戸山さんも、お見合いだなんて思っていらないわ」

と、佐紀子は言った。

塩見先生とは、大学の歴史の助教授のことで、戸山さんというのが、大学を卒業したはやはやの医者のお卵であるらしい。

「だって、あんまり急だわ」

碧雲は戸山の写真を机のうえに伏せて言った。

佐紀子の話では、話題の二人は、彼女の父親の知人の縁者であるという。根津宏二郎は、かねてからいろんな

筋を通じて、関西在住の花智候補者をえらび、この二人にしぼったのであるらしい。適齡期をややすぎた娘をもつ父親としては、無理からぬ努力であろう。妻の道子からも、

——親の責任でございますよ。

と督促されていたのである。そうして娘の相手をさがすついでに、碧雲のことも心がけていたのにちがいない。明日のことは、

——引越し祝いに、若い者を招く。

という形にして、正式の見合いの一段階前ぐらいの心づもりであるようだ。

「お二人のご都合は、明日が一ばん良いということらしいのよ」

と、佐紀子は言った。

相手の都合はともあれ、碧雲にも自分の都合というものがある。

「明日は京都へ行くつもりだったけど……」

「野口先生のところ？」

と、佐紀子は訊いた。じつは日本画も、さきに佐紀子が習いはじめて、碧雲を誘ったのだった。佐紀子は飽きっぽく、途中でやめてしまったが、絵の先生方のことはよく知っていたし、展覧会などにはいつも顔を出してい